スペイン・ラテンアメリカ通信

第１４号

京都外国語大学外国語学部スペイン語学科編

本誌はスペイン語とスペイン語圏の文化･社会･歴史の専門家が、スペイン語を学ぶ高校生や大学生に向けて発信するアカデミック情報誌です。

スペイン圏の首都　A～D はスペイン語を公用語とする南米の国の首都です。それぞれどこの国にありますか?（答えは８頁）

※　(A)の都市は行政上の首都で、この国の憲法上の首都はスクレという別の都市です。



（A）　ラパス



（B）　カラカス



（C）　モンテビデオ



（D）　アスンシオン

ジャポニズム(Japonismo):
ヨーロッパから見た日本画の魅力

近年、日本は世界的水準で流行の先端を行く国になりました。漫画やアニメは言うまでもなく、グルメ、文化、芸術の面でも日本はこの国に魅力を感じている世界中の人々を惹きつけています。しかし、これは今に始まった現象ではありません。みなさんは 19 世紀のヨーロッパでも日本ブームが起きたことをご存知でしょうか。事実、当時のヨーロッパ人があまりにも日本に魅力を感じていたので、この現象は「ジャポニズム」と名づけられました。

日本は鎖国の下で国際的に孤立していた 2 世紀を経た後、1854 年に開国し、海外との通商を始めました。このとき日本のたくさんの文物が、たとえば浮世絵、陶器、扇子、宝石、着物、家具などがヨーロッパにもたらされるようになりました。1867 年、フランスのパリで万国博覧会が開かれ、日本も参加しました。これが切っ掛けでヨーロッパ全土にジャポニズムが広まりました。この芸術的・文化的運動はこの時代のヨーロッパ芸術、特に視覚芸術、ファッション、装飾、文学、音楽の分野に大きな影響を与えました。

ジャポニズムはフランスの芸術家の間で特に重要視されました。彼らはヨーロッパの伝統的な絵画とはまったく異なる斬新なスタイルを日本の木版画、つまり浮世絵に見出したのです。絵画史のなかで最も重要な画家の一人がフィンセント・ファン・ゴッホ(1853-1890)です。彼は 1886 年から 1888 年のパリ滞在中に日本の浮世絵と出合いました。ゴッホは 600 点以上の日本の木版画を集め、自分のアトリエの壁を覆い尽くしました。ゴッホの最も有名な作品のいくつかはこれらの木版画からヒントを得て創作されたのです。ゴッホは江戸時代の歌川広重による《名所江戸百景》というたいへん有名な木版画の中から《大はしあたけの夕立》(1857)をはじめとする木版画のいくつかを模写しています。1887 年、ゴッホはこの木版画を模写した作品を制作したのですが、このときできるだけ濃い色を使い、絵の周りを漢字で飾りつけています。その漢字は彼自身が他の木版画から写しとったものでした。写真 1 をご覧ください。この作品の二つの版が並んでいるのがわかりますね。左側が広重の作品で、右がゴッホによるものです。タイトルはフランス語で *Le Pont sous la pluie (d'après Hiroshige)* と書かれており、日本語に訳すと「広重による雨の中の橋」になります。



写真 1:左は広重作、右はゴッホによる模写

ゴッホはまた作品の中に日本的要素を採り入れてもいます。1887 年に作成された有名な《タンギー爺さんの肖像》には、パリで店を営んでいた画商であるジュリアン・タンギーの肖像が描かれています(写真 2)。この絵の上方、タンギーの帽子の後ろには富士山が見えます。さらに、ゴッホは壁面に歌舞伎役者を描き、桜など日本の典型的な自然を題材とした木版画まで描いています。彼にとって日本は、素朴な生活と自然とが理想的に調和している国として映っていました。ゴッホの絵画に見られるこうした日本的要素は、彼が求める静粛(せいしゅく)さを表現しています。

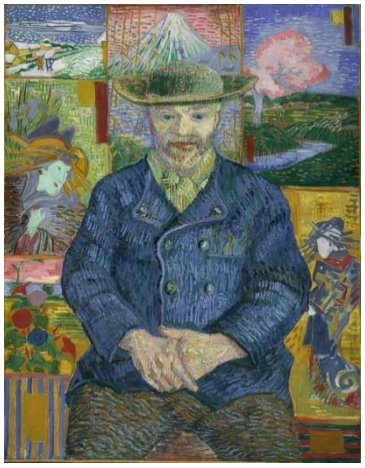


写真 2:ゴッホ作《タンギー爺さんの肖像》
(1887 年、ロダン美術館所蔵)

ジャポニズム画家として他に重要な人物といえばクロード・モネ(1840-1926)で、彼もまた自作の絵画に日本の文物やモチーフを採り入れました。こうした作品のひとつが《ラ・ジャポネーズ(着物を着たカミーユ)》で、1876 年に描かれました。モネは、妻のカミーユが赤い着物を着て畳の上に立っているところを描いており、団扇(うちわ)で飾られた壁が背景になっています(写真 3)。モネはこの作品に日本的要素を構図の一部として組み込み、西洋的な要素と日本の「エキゾティックな」要素を対比させています。彼が淡い色を使い、東洋的な文物を組み入れたことから、ジャポニズムが当時の芸術家の流行とパリ文化にどれほど浸透していたかがよく理解できます。



写真 3:モネ作《ラ・ジャポネーズ》
(1876 年、ボストン美術館所蔵)

ジャポニズムは、芸術における文化的グローバル化という現象が起こった最初の例です。そして、思想や文物の国際交流がいかに深く芸術的創造性に変貌したかを示しています。ゴッホやモネのような画家のおかげで、日本の美学がヨーロッパ絵画に重要な痕跡を残し、斬新な構図や色彩、モチーフ、さらには自然や日常生活の見方までもが導入されました。このときから日本の芸術と文化は、斬新なものの制作に携わろうとするヨーロッパ人にとってヒントを得るための源になったのです。

Gisele Fernández Lázaro
(ヒセレ・フェルナンデス・ラサロ/スペイン芸術・演劇)

フアン・ラモン・ヒメネスの『プラテーロとわたし』における比喩

フアン・ラモン・ヒメネスはスペインの作家で、1956 年にノーベル文学賞を受賞しました。彼はスペイン文学の中でも特に感動的な詩的作品の一つ『プラテーロとわたし』の作者で、この本では、南スペインの小さな町モゲールで若い作家がロバのプラテーロと過ごした日々が描かれています。その本がスペイン語から日本語に翻訳されていて、物語に合わせたきれいな挿絵もついています。実はフアン・ラモン・ヒメネスは 1896 年、まだ子供の時に絵描きになりたくてセビリアに引っ越したのですが、そこで初めて散文や詩を書き始めました。19 歳の時にマドリードに引っ越し、最初の作品を出版しました。その年、父が急に亡くなり、家族も経済的に大変な状態になりました。その影響でフアン・ラモンは重いうつ病にかかってしまいました。1905 年には故郷のモゲールに戻って、ちょうどこの頃が一番作品をたくさん書いた時期で、「感覚の時代」って呼ばれています。その時期の代表作のひとつが『プラテーロとわたし』という本で、1906 年と 1912 年の間に書かれたものです。この本は全部で 138 のとても短い章から成り立っていて、文学的な言葉づかいのため本来は大人向けですが、子どもたちの間でもとても人気があります。

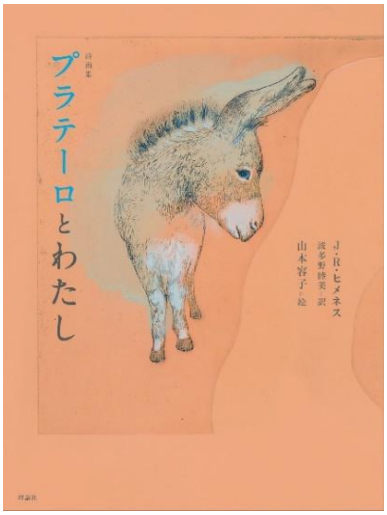


写真 1:『プラテーロとわたし』日本語版
(波多野睦美訳、理論社)

これから本のいくつかの文章を読んで、プラテーロに直接触れながら、フアン・ラモンの言葉の美しさを感じてみましょう（すべて波多野睦美訳）。これは本の冒頭の部分です。

プラテーロは小さくて　ふわふわした　柔らかい毛のロバ。とてもふんわりしているので　身体が綿（わた）でできていて　骨がないみたいだ。でもその瞳は　硬く　きらめく黒い水晶カブトムシ。

この一文からは、比喩やたとえの美しさに加えて、フアン・ラモンの文章に漂うノスタルジックな雰囲気を感じ取ることができます。

「お告げの金」という題名の章では、聖母マリアと天使との出会いに関わるキリスト教の伝統が参照されています。天使からイエス・キリストを身ごもっていることを告げられるという物語で、そこに次のような一節があります。

ごらん　プラテーロ　薔薇（ばら）が　あたり一面に降りそそいでいる。青い薔薇　白い薔薇　色のない薔薇　まるで空が溶けて　薔薇の花になったようだね。ほら　薔薇でいっぱいだ　私の頭も　肩も　両手も　こんなにたくさんの薔薇　一体どうでしょうか？

あなた自身は読者としてどういう意味だと思いますか？薔薇のイメージのこと？



写真 2：1996 年の映画『プラテーロとわたし』

「結核の娘」という題名の章はとても心温まる内容です。村の病気の女の子がほとんど歩けず、息をするのも大変な様子が描かれています。

その声は子供っぽく　かぼそく　とぎれとぎれに　かすれていた　時々吹いては止んでしまう　夏のそよ風のように。私はプラテーロを　彼女の散歩にかしてあげた。ロバの上の娘がたてる笑い声！

こうしてプラテーロは村の子どもたちと友だちになります。本の結末は少し悲しく、プラテーロの死が描かれていますが、その表現はとても詩的です。

正午　プラテーロは死んでいた。小さな綿のような腹は丸い地球のようにふくれあがり　四つの脚は　硬く血の気をなくし空をさしていた。しんとした 厩（うまや） 。光りながら飛んでいた。小さな窓から　さす光の中を　美しい三色の 蝶（ちょう） がただ一羽。

フアン・ラモン・ヒメネスは、プラテーロの魂が人間の魂と同じようにキリスト教でいう「昇天」を遂げたことを私たちに伝えたいのだということがはっきりわかります。そして、そのために、三色に染まった美しい蝶（父なる神、子なるキリスト、聖霊）という象徴を使っています。

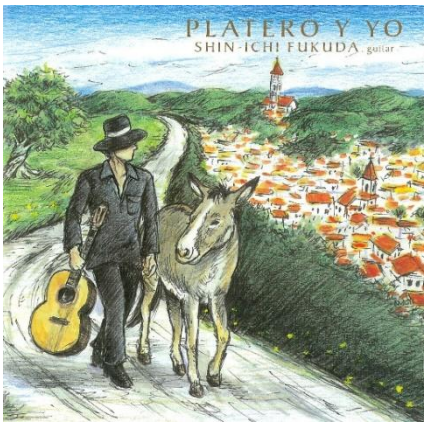


写真 3：『プラテーロとわたし』に触発された音楽

フアン・ラモン・ヒメネスは、多くの詩集でも知られていますが、何よりもこの散文と詩が融合した美しい本の作者として、そして文学史上最も愛らしいロバを生み出したことでも、いつまでも記憶されるでしょう。この本の影響で、ギター音楽や映画も作られるなど、その作品は今も人々に愛されています。

Daniel Arrieta（ダニエル・アリエタ／比較文学）

¿Cuál es tu color favorito?

¡Hola a todos! みなさん、こんにちは。スペイン語の学習はいかがでしょうか。

今回は色彩を表す単語について取り上げたいと思います。まずは基礎単語を確認しておきましょう。原色とされる色彩は「白い」「黒い」「赤い」「青い」「黄色い」ですね。それぞれスペイン語で何と言いますか？―答えは順に blanco, negro, rojo, azul, amarillo です。それでは応用練習です。「私は白い T シャツを 1 着買いたい」をスペイン語にしてください。「T シャツ」は camiseta といいます。答えは、“Quiero comprar una camiseta blanca.”―camiseta は女性名詞なので、形容詞の語尾は-a に変えないといけませんね。先に挙げた 5 語の形容詞のうち男性形／女性形の変化がないのは azul だけです。

さて、色彩といえば中間色も言えるようにしておきたいものです。たとえば、「灰色の」「空色の／水色の」「緑の」「紫の」「茶色の」をスペイン語にすると、順に gris, celeste, verde, morado, marrón になります。この中で morado には morada という女性形があり、「紫色の T シャツ」なら camiseta morada になります。それでは、「ピンク色の」「オレンジ色の」「クリーム色の」といった中間色はどうでしょうか。これらは名詞の rosa「バラ」、naranja「オレンジ」、crema「クリーム」を形容詞として転用します。そのため、本来の形容詞にみられる性変化（男性-o、女性-a）がなく、男性名詞に付けてもこれらの語尾は-a のままです。たとえば、「ピンク色のワンピース」は vestido rosa、「オレンジ色のワンピース」なら vestido naranja といいます。名詞から転用した中間色を表すこれらの形容詞には、文法的にみて少し変わった特徴があります。本来なら名詞が複数形になると形容詞も複数形にするのが鉄則です。「青い 1 台の車」は un coche azul ですが、これを「2 台」にすると dos coches azules と言わなければいけませんね。ところが、「2 着のピンク色のワンピース」の場合、dos vestidos rosas と dos vestidos rosa のどちらの例も実在します。色彩語としての rosa や naranja は名詞と形容詞の中間のような単語で、おそらく完全に形容詞になり切れていないために、時として性数一致の原則から外れることがあるのでしょう。

それではここまで見てきた色彩語を表にまとめてみましょう（表 1）。なお、性変化するものには男性形と女性形の両方を掲げておきます。

黒い	negro, negra
白い	blanco, blanca
赤い	rojo, roja
青い	azul
黄色い	amarillo, amarilla
灰色の	gris
空色の／水色の	celeste
緑の	verde
紫の	morado, morada
茶色の	marrón
ピンク（桃）色の	rosa
オレンジ色の	naranja
クリーム色の	crema

表 1：スペイン語の主な色彩形容詞

考えてみれば、日本語の色彩名にも面白い特徴があります。「白」「黒」「赤」「青」「黄色」「茶色」はそれぞれ「白い」「黒い」「赤い」「青い」「黄色い」「茶色い」と、語尾に「-い」をつけると形容詞になりますね。ところが、「緑」「紫」「水色」「灰色」「桃色」などはどうでしょうか。これらに「-い」を足して形容詞にするということが不可能ですね。日本語の色彩名称にもこうした不統一な側面が見られます。

スペイン語における色彩形容詞の性数変化の不徹底といい、日本語における色彩形容詞の不揃いといい、色彩にかかわる単語はどうやら単純ではなさそうです。色彩というものを物理的な観点で説明するなら、それは可視光線の波長の度合いです。波長が長ければ赤、短ければ青、中間なら黄色として人間には認識されます。ある物体が長波長の可視光を反射し他を吸収してしまえば、それは私たちにとって赤く見え、短波長を反射して他を吸収すれば青く見えることになります。すると、白いものは可視光線のすべてを反射する物体であり、黒いものとはすべての可視光線を吸収している物体ということになります。これが色彩の正体です。こうして現実の色彩は無限のグラデーションを形成しているため、中間色というものは無数に存在することになります。だからこそ、視覚的な識別の結果である色彩をことばという音声で表現するためには、どの言語においても表現上の工夫が必要だったに違いありません。その表れが「～のような色」のように、その色彩を代表する物体の名称を色彩名称に転用するという方法です。現代スペイン語で完全な色彩形容詞と認識されている語であっても、語源をたどればもともと名詞だったというものがあります。たとえば、azul「青い」は「瑠璃」を意味するアラビア語が語源です。また、marrón「茶色の」という語はフランス語から来た借用語で、これは「栗」のことです。gris「灰色の」と blanco「白い」の由来はスペイン語と系統を異にするゲルマン語（＝英語と同じ系統の古代言語）であり、ラテン語から受け継がれた本来のスペイン語単語ではありません。そう言えば、スペイン語の blanco と英語で「余白、空白」を意味する blank は語形がそっくりですね。もちろんこれは偶然ではなく、語源が同じだからです。このようにスペイン語の色彩形容詞は、さまざまな言語からの寄せ集めです。スペイン語の色彩形容詞における性数一致のルールが不徹底であったり、語源がまちまちだったりするのは、多様に目に映る色彩を表現するためにあれこれ苦心してきた結果と言えるのではないでしょうか。

最後に、みなさんにスペイン語でお尋ねしたいと思います。答えもスペイン語でどうぞ。

-¿Cuál es tu color favorito?

岡本信照（おかもと　しんしょう／スペイン語史）

縮小辞は奥深い！

スペイン語で次のような会話はごく日常的に聞かれます。

1） Quiero un poquito más de pimienta.
（私はもうちょっとだけ胡椒がほしい。）

2） Espere un momentito, por favor.
（ほんのしばらくお待ちください。）

3） Vamos despacito.
（ゆ～っくり行こう。）

上の例の下線部に注目してください。どれも-ito になっていますね。本来なら 1）は un poco「少し」、2）は un momento「しばらくの間」、3）は despacio「ゆっくり」と言えばそれで済むところです。一体、この-ito とは何でしょう？

これは「縮小辞」という語尾の一種で、簡単に言えば標準よりも小さめのもの、つまりミニサイズであることを表します。名詞、形容詞、副詞のどれに付けてもよく、スペイン語話者は日常的に頻用します。この語尾を追加することで、「少し」（un poco）を「ほんの少し／ちょっとだけ」（un poquito）のようにニュアンスを微妙に変えることができるわけです。なお、縮小辞は上の例に挙げた-ito だけではありません。-cito, -illo, -cillo, -ete, -ín, -uelo, -zuelo など実に豊富な種類があります。さらに、最後の母音を-a に変えて女性形にすることもできます。よく耳にする例として、perro「犬」→perrito「子犬」、niña「女の子」→niñita「（小さな）女の子」、ventana「窓」→ventanilla「（チケット販売などの）窓口」、bolso「ハンドバッグ」→bolsillo「ポケット」、botella「瓶、ボトル」→botellín「小瓶」などがあります。おそらくみなさんは bonito という形容詞をもうご存じでしょう。意味は「美しい」ですね。実はこの形容詞、もとは bueno「良い」であり、そこに縮小辞-ito が付いてできた語でした。

ここでクイズです。次の表の 7 語に縮小辞を付けると少し意味が変化します。辞書を引かずに意味を推測してみてください。ヒントは元の単語のミニ版です。

1	pez　魚	→ pececillo
2	paño　布、毛織物	→ pañuelo
3	palo　棒	→ palillo
4	zapato　靴	→ zapatilla
5	calle　通り	→ callejuela
6	silla　椅子	→ sillín
7	libro　本	→ libreta

正解は、「1.小魚」「2.ハンカチ、スカーフ」」「3.爪楊枝、(複数形で) 箸」「4.スリッパ」「5.裏路地」「6.サドル」「7.通帳、メモ帳」です。

ところが面白いことに、見た目が必ずしも「小さい」とは言えないものに縮小辞を付けることがよくあります。たとえば、「泥棒」を意味する ladrón に縮小辞の-zuelo を付けた ladronzuelo という語があります。「小柄な泥棒」のこと？いいえ、この語は大柄な泥棒にも使えます。これは「コソ泥」のことで、小さいのは体格ではなく手口のほうだったのですね。この場合の-zuelo にはネガティブな評価が含まれています。また、スペイン語話者は自分の身内を表す語によく縮小辞を付けます。mi abuelito/ abuelita「うちのお爺ちゃん／お婆ちゃん」、mi hermanito/ hermanita「うちの兄ちゃん（または弟）／姉ちゃん（または妹）」、mi amiguito/ amiguita「私の（仲の良い）友達」などです。これらの場合の縮小辞は、その身内に対する親愛の気持ちを表していて、ポジティブな評価を加えています。

同じことは形容詞にも当てはまります。たとえば caliente は「温かい、暖かい」という意味の形容詞ですね。これを calentito と言い換えると、温もり具合がちょうど心地良いものとして伝わります。あえて訳し分けるとするなら、calentito は「ほかほかの、ぽかぽかの」といったところでしょうか。このように、縮小辞は物理的に規模が縮まったことだけではなく、精神的・観念的な観点から愛らしさや親近性、そして時には小さいがための負のイメージさえ表す機能があるのです。

縮小辞は英語や日本語にも存在しないわけではありません。英語で booklet「小冊子」、pamphlet「パンフレット」、bracelet「ブレスレット」のように-let という語尾で終わる単語がいくつもありますね。この-let は縮小辞です。これ以外に、pocket「ポケット」、basket「かご」、tablet「タブレット」などに見られる語尾-et や、pencil「鉛筆」の-cil も同様です。考えてみれば、日本語の「ちびっ子」「いたずらっ子」「石ころ」といった接尾辞や、「小ぎれいな」「小難しい」などの接頭辞「小-」も縮小辞とよく似た働きをします。そうした意味では、縮小辞がスペイン語に限ったものとは言えないかもしれません。しかし、スペイン語の縮小辞は生産性が非常に高く、いつ誰がどのような単語に付けてもおかしくないくらい頻繁に用いられます。

小粒ながら末尾に追加するだけで元の単語の意味を微妙に変えてしまう縮小辞は、まさに料理に添えて味を微妙に変えるスパイスのようなものです。そう考えるとなかなか奥が深いですね。なお、縮小辞とは反対に、標準よりも大きいものを表す「増大辞」という語尾もあります。これについては、またの機会に取り上げたいと思います。

岡本信照（おかもと　しんしょう／スペイン語史）

【読書案内】『一冊でわかるメキシコ史』

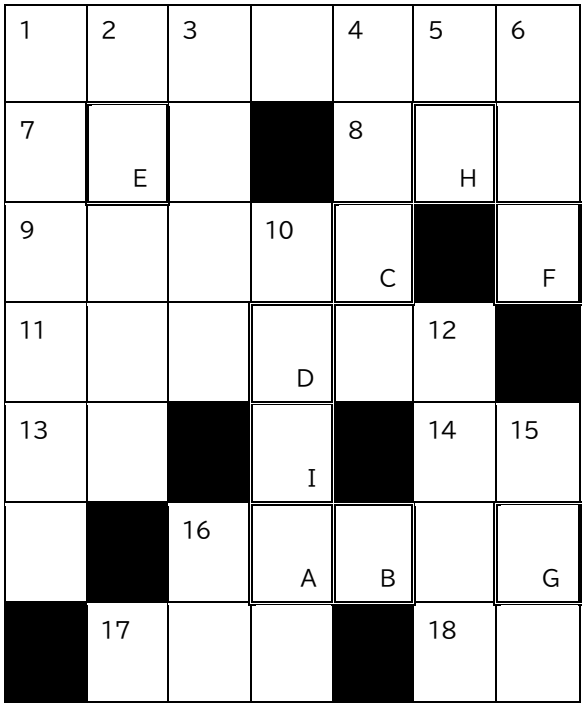


国本伊代監修、河出書房新社、2025 年、全 205 頁

『一冊でわかる〇〇史』は高校生でも読める歴史書のシリーズ。今年、待望の「メキシコ史」が出た。古代文明時代、スペインによる植民地時代、独立後の近代以降の時代について、わかりやすく書かれている。世界遺産登録数 37 件を誇るメキシコの歴史がいかに重層的につくられてきたかをぜひ学んでほしい。

CRUCIGRAMA 14

1マスに大文字1字を記入してください。CH, LL, RRは2文字扱いです。アクセントつきの母音(Á, É, Í, Ó, Ú)とアクセントなしの母音は別の文字とします。二重線の A～I を並べ替えてできたスペイン語圏の地名を当ててください(答えは次号)。 (出題／岡本信照)



タテのかぎ (VERTICAL)

1.「地球規模の、グローバル」をスペイン語では？

2.「鉄格子」。複数形。

3. ____ fue viernes.「昨日は金曜日だった」。

4. Este pan está ____.「このパンは固くなっている」。

5. ¿Dónde vives?-Vivo ____ Madrid.

6. Hoy hace ____.「今日は陽が照っている」。

10. El tren ____ de salir.「列車は出たばかりだ」。

12.「大豆」。salsa de ____とは「醤油(しょうゆ)」のこと。

15. ¿De dónde eres?-____ de Japón.

16. Voy ____ trabajo.「私は仕事に行く」。

ヨコのかぎ (HORIZONTAL)

1. Hay muchas casas ____.「大きな家がたくさんある」。

7.「法律」。

8. ____ dos, tres, cuatro, cinco...

9.「ざっと目を通す」という意味の動詞。ojo「目」から派生。

11.「船」。複数形。

13.「ダイヤのエース」のことを____ de diamante という。

14. ____ veo mañana..「明日君たちに会う。」

16. El baño está ____.「トイレは下にある」。

17.「波」。____ de calor とは「熱波」のこと。

18.間投詞の一つ。i____, qué pena!「ああ、可哀そうに！」

A～I を並べると?

A	B	C	D	E	F	G	H	I

CRUCIGRAMA 13 (第13号)の解答

G	A	T	A	■	N	I
A	■	A	S	C	O	■
F	E	R	I	A	■	A
A	N	D	A	M	O	S
S	■	E	■	P	■	Í
■	E	S	T	O	Y	■
O	S	■	É	■	A	L

A～G の答え： POLICÍA「警察」

―1頁のクイズの答え―

(A)ボリビア (B)ベネズエラ (C)ウルグアイ (D)パラグアイ

今回の記事執筆者(掲載順)

ヒセレ・フェルナンデス・ラサロ(京都外国語大学准教授)

ダニエル・アリエタ(京都外国語大学准教授)

岡本信照(京都外国語大学教授)

スペイン・ラテンアメリカ通信 第14号

2025年10月30日発行

発行者：京都外国語大学外国語学部スペイン語学科

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

URL. https://www.kufs.ac.jp

E-mail. s_okamot@kufs.ac.jp

京都外国語大学
Kyoto University of Foreign Studies